近世文学＝江戸・徳川時代

OTOGIZŌSHI 御伽草子から

KUSAZŌSHI 草双紙

KANAZŌSHI 仮名草子(MONOGATARI 物語)

YOMIMONO 読み物

YOMIHON 読本

日本古典文学II 2021
Neide Hissae Nagae

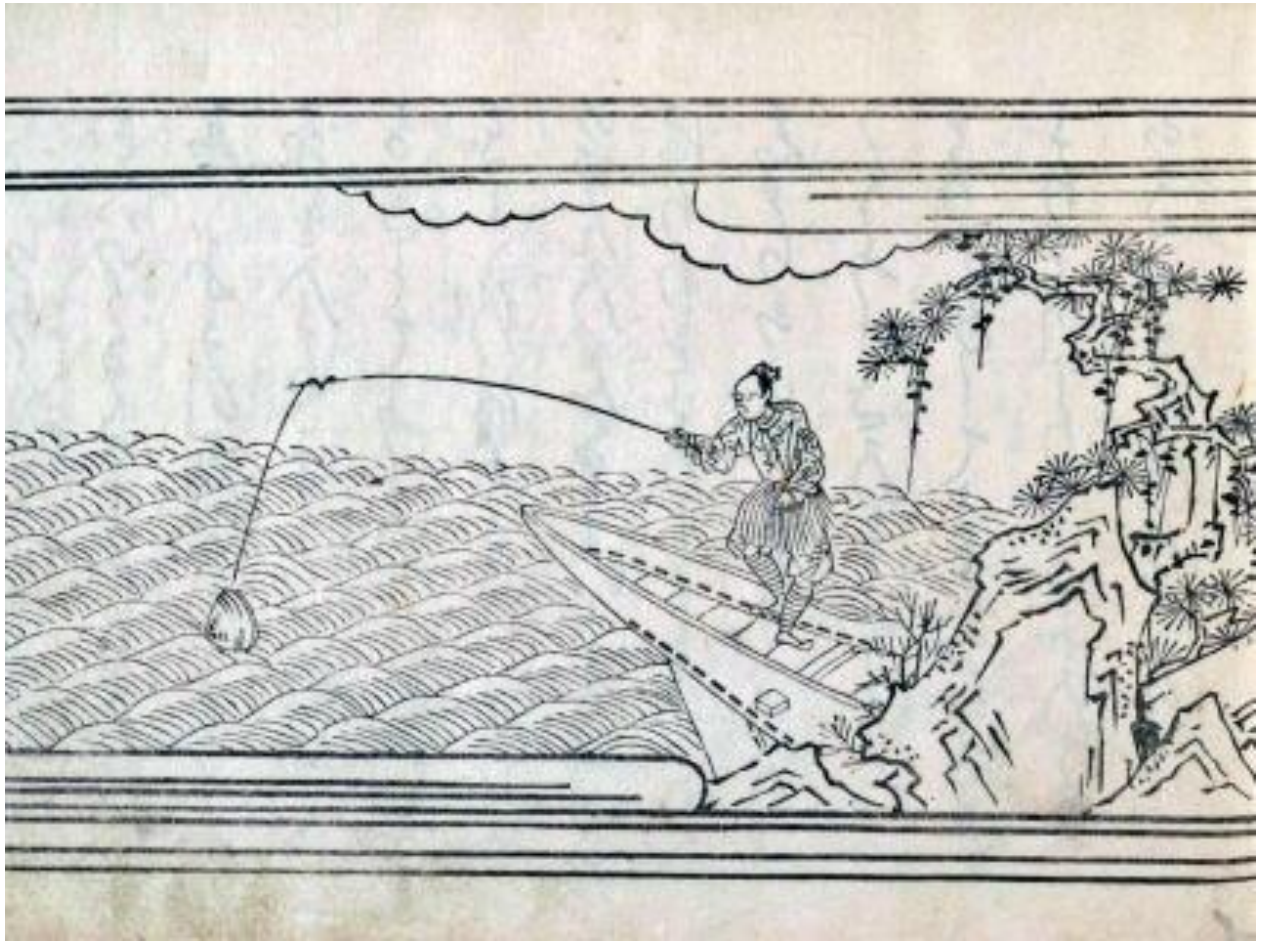
Kamakura/Muromachi　MONOGATARI 物語　—　YOMIMONO読み物

草双紙

MUROMACHI	OTOGIZŌSHI　御伽草子		
Séc. XVII	KANAZŌSHI 仮名草子 Asai Ryōi ´「浮世物語」　(A/M, p.106) Em Kanji e katakana Em hiragana (一休水鏡) 犬まくらa　いぬまくら　犬まくらb	KUSAZŌSHI　草双紙 Sem datas certas Em kanji e hiragana com Ilustração　(赤本の例) 日下開山 名人ぞろへ 藤田 ほうかの根本	
Séc. XVII	UKIYOZŌSHI　浮世草子 Ihara Saikaku Ejima Kiseki	AKAHON　赤本 KUROHON　黒本 AOBON　青本 - 丸仮名 -	
Séc. XVIII	YOMIHON 読本　ZENKI 前期 Ueda Akinari 雨月物語	KIBYŌSHI　黄表紙 - 漢語をふんだんに - Koikawa Harumachi 1775　金々先生栄華の夢 二巻二冊 1806　雷太郎強悪物語 十巻二冊 Santō Kyōden 最盛期	SHAREBON　洒落本 Santō Kyōden 傾城買四十八手(A/M, p.113) KOKKEIBON　滑稽本 Jippensha Ikku Shikitei Samba
Séc XIX	YOMIHON 読本　KŌKI 後期 Kyokutei Bakin 南総里見八犬伝	GŌKAN　合巻 明治まで草双紙のすべて Ryūtei Tanehiko 1842　贋紫田舎源氏38編 172冊目で絶版	NINJŌBON 人情本 Tamenaga Shunsui 春色梅児誉美

- **御伽**　トギ＝相手をすること

- **草紙・冊子・草子・双紙**
  ①綴じた書冊②仮名文の書。物語・日記・歌書の類3中古の物語から出て絵を主とした小説。④書いてまだ整頓せぬ下書き。草案。⑤練習に使用せられるもの。
- **御伽草子**
  ①狭義には享保頃大阪の書肆渋川清右衛門の刊行した「文正草子」「鉢かつぎ」など。
  ②広義には室町時代を中心に行われた短編小説の汎称。作者は多く未詳。空想的・教訓的な童話風（必ずしもそうばかりとはいえまい。大人の童話風とでもいうのではあるまいか）の作品。よく時代思想と世相とを反映。
- **奈良絵**
  室町末期から江戸にかけて奈良の東大寺・興福寺などの絵仏師が注文や商品として大量的に書いた。手書き。
- **奈良絵本**
  奈良絵を挿入した一種の絵本。内容は「源氏物語」「住吉物語」などもあるが、お伽草子を主とし、横本と縦本とがある。教養の低い読者、または婦女子を対象としたもの。金泥・銀泥を用いた豪華な美本もあり、棚飾り本、嫁入り本とされた。



蛤の草子　末

- https://hamasakaba.sakura.ne.jp/012otogi/9811/s1105d1.jpg, acesso em 20 out. 2021

OTOGIZŌSHI 『御伽草子』

『日本古典文学大系』より28

- 文正さうし
- 御曹子島渡
- 七草草子
- さざれいし
- 二十四孝
- 猫のさうし
- 一寸法師
- 横笛草紙
- 鉢かつぎ
- 唐糸さうし
- 猿源氏草紙
- 蛤の草紙
- 梵天国
- 浜出草紙
- さいき
- 酒呑童子
- 小町草紙
- 木幡狐
- 物くさ太郎
- 小敦盛
- のせ猿さうし
- 和泉式部
- 浦島太郎
- 福富長者物語
- あきみち
- 熊野の御本地のさうし
- 三人法師
- 秋夜長物語

『岩波文庫　御伽草子』より　・朝顔の露の宮・かくれ里

『岩波文庫　続御伽草子』より　・鶴の翁・ささやき竹・をこぜ

『新潮日本古典集成』より　俵藤太郎物語・弥兵衛鼠絵巻

『枕草子』『徒然草』　　仮名草子・草双紙

- 「くさ」の語は似て非なるもの、本格的ではないものの意。
- 「双紙」は絵入りの軽い読み物をいう。
- 「草双紙」の語はあまりちゃんとしてない、通俗的な本のイメージがある。
- 「臭双紙」の名があるのは再生紙を使用しているからと曲亭馬琴はいう。
- 体裁－草双紙18cmX12cm, 10ページを一巻一冊、通常二冊から三冊で完結
  黄表紙は一巻一冊
  合巻は三巻、五巻などを合綴して、一遍一冊とし、100篇を超える大部のものもある。
- 表紙－時代によって異同がある。
- 草双紙－整版（板一枚の木版）印刷の機能を最もよく生かした出版物
  最初は子供向けの絵本として誕生。
  丹色の表紙が付けられていたため、赤本と呼ばれている。
- 刊行時期－正月（子供のお年玉）
- 題材－前代の御伽草子などで聞き慣れたお伽話や童話、地方に伝わる昔話で、話の筋は文字ではなく絵を主としてえがかれて展開。文字は漢字のほとんどない丸仮名

『枕草子』『徒然草』　　仮名草子・草双紙　（続き）

- 登場人物の名前・「おや、まあ」などの感嘆詞・会話の類の日常語は添え物てき存在。字数は極めて少ない。親が絵を見ながら子供に話を作りながら聞かせるといった性格が強い。
- その後、作者の存在感のある創作的な話が喜ばれるようになり、話の筋も絵ではなく、文字によって記されるようになる。文字の数も飛躍的に増加して、読書習慣の乏しい庶民の大人を主たる読者とする作も生まれ、新しい都会文学の形式を産み出す。
- 地口や洒落言葉といった言語遊戯的な表現が盛んにおこなわれたのも江戸っ子の誕生と、方向性こそ一定ではなかったものの、江戸っ子の連帯意識のたかまりと無縁ではなかった。
- 画工の署名があっても作者名はほとんど記載されていない。
- 滑稽本・洒落本などの江戸の町に江戸独特の文学－浮世絵が飛躍的発展をとげた時代で、その影響を受け、1772年には三色・1775年には4色の色摺りとなった。

宇田俊彦「解説」木村八重子　宇田俊彦　小池正胤新日本古典文学大系83『草双紙集』岩波書店 1997 p . 593-597

仮名草子

Narrativas em Prosa – p. 44 História da Literatura Clássica Japonesa – Andrei Cunha e Meiko Shimon (p. 41-50) *Brasil Nikkei Bungaku* 59. Julho/2018.

秋山虔・三好行雄『新日本文学史』文英堂、2010　P.106～110

【小説】

仮名草子

浮世草子　井原西鶴

西鶴以後－八文字屋本

為人鈔巻第一

序

蒙竊ニ光陰ノ移易キヲ観スルニ。此年月アヤマリ来レル身ノ愚サハ。歎テモ余アリ。悲テモアキダラズ。抑〳〵往ヲ尤テ、豈何ノ益アランヤ。ソレ惟ニ。来者ノ追ヘキ事ヲシランニハ。智者ノホトリニタチヨリテ。往昔ノ物語。耳ナレ心ニウツリナバ。誠ニ「一オ闇夜ノ燈トモナリナンモノヲト打嗟キ。是ヲ学ヒノ本トシテ。志学ノ年モ過ヌレド、同国ノカタハラニ。俗儒ノ名アルヲ、シタヒヨリ。句読ノ隙アル折々ハ。月ヲソキ、ユフヘノ空ヲマチ。螢雪ニ心ヲカケ侍レドモ。素性ヤ愚ニシテ。道ノ心ニウトケレバ。師弟座客ノ清談ヲ。反古ノ裏ニ書アツメ。ムカシガタリヲ今見レバ。和漢ノ言種「一ウシゲリアヒテ。跡先エシラヌ事ドモノ。浜ノ真砂ノ数ツモリ。人ノ詠ヲマツノ葉ノ。チリ失ヌヤウニシテ。匱ノ中ニ蔵ヲキ。爾来。余亦微官ニ公余ナク。六七年ハ遺妄シテ。ウチ過ル。

是歳郝隆曬書ノ日。蠹ノ巣ニモナレルヤ、ト。ヒライテ閲レバ、アラカジメ。猶オロカナルキハニ書付ハベレバ。我意ニウチマカセテ。聖賢ノ金言ヲ。ツタナ「二オキ筆鋒ニ和ゲテ。書損ジヌル、ソノオソレ。罪ヲ逃ルヽニ所ナシ。去トテ、ナゲヤリスツベキモノニモ、アラザレバ。笑草ノ為ニ。遼東ノ豕ナガラ。心友ニ見セヌレバ。ヨシヨシ愚人ノ為ニハ。間助ニモナリモヤセント。諫シ方ニヒカサレテ。ソヾロニ筆ヲ染テ清書ス。他日後見ノ人アラバ。一笑ヲ止テ、添削ヲ仰而已。」二ウ

仮名草子
漢字カタカナ
5頁

仮名手本『一休水鏡』
215頁上段

テキストと短歌
丸仮名

一休水鏡（慶長古活字十行本、一冊）

君のちとせを、へん事も、あまつをと女の羽衣よなふ、万せいましませ、いはふかうへ

われみても久しくなりぬすみよしのきしのひめまついく世へぬらん

めなしとち〳〵、こゑにつゐて、ましませ

抑、みな人たちの、さとりとやらん、いふ事を、さとる、そのならひハしめに、父母もなき、とつといせんの、わか身は、なにものそ、いへ、きかんといふ

何として、しらぬことか申さるへくゆや、たゝ、へんてつも、なきものなり、と」一ォ 思ふへし、たとへは、よしの、はつせの、はなもみち、いろ〳〵に、さきて、ちりて、又、もとのやう〈根〉に帰るかことし

本末もなきいにしへの我なれはしにゆくかたもなにもかもなし

よの中のよめかしうとにはやなれは人も仏になるはほとなし

行水に数かくよりもはかなきはほとけをたのむ人の後の

犬枕

（写本、横本、七十四題・三百四十七句）

うれしき物　（一）

1 一、人しれぬなさけ
2 一、なそたて、ときたる
3 一、まちかひの、ほりいたし
4 一、おもふかたよりの、ふミ
5 一、あつらへ物之、よく、いてきたる
6 一、つきよに、かね、ひろいたる

かなしき物　（二）

7 一、あかぬ、わかれ
8 一、いまわのとき
9 一、ふゆのに、のとる、むしのね
10 一、かたみを、ミるたひ
11 一、をくりすてゝ、かへるの

犬枕

（写本、横本、七十四題・三百四十七句）

したい物　（三）

12 一、とうせい、はやる、たてとうく

13 一、すき屋の、さくし

14 一、遊山

いやな物　（四）

15 一、いちきの、〻ちの、そいねの女

16 一、へたの、すきニ、よふ

17 一、ゆさんけんふつしうの、とも

18 一、けよやうも、せぬ、しゆつくわい

19 一、かけのある、よの中、きやくしん

20 一、うらおもて、ある心

みたい物　（五）

21 一、おもふ人の、かほつき　花は、つね也

22 一、ちやうすの、のふ

仮名草子
289 上・下

犬まくら（写本、枡型本、七十一題・三百二十句）

仮名草子
307頁 上・下

いぬまくら（写本、国籍類書の内、七十二題・三百四十三句）

天理図書館蔵本翻刻第二八九号

一　うれしき物（一）

1　人しれぬ、なさけ
2　町かひの、ほり出
3　なぞだて、ときたる
4　若衆の、ねん比状
5　誂物、はやく、てきたる時

一　かなしき物（二）

6　あかぬ別
7　今はの、きは
8　冬野に残る、虫の音
9　形見を、見るたび
10　をくりすてゝ、帰る野

一　したい物（三）

11　しり　同へゝも

うれ敷物（一）

1　一、人しれぬ、なさけ
2　一、町かいの、ほり出し
3　一、なそたての、ときたる
4　一、あつらへ物、早出来時
5　一、わか衆の恋（懇）の状

かなしき物（二）

6　一、あかぬ別
7　一、冬の野ニ、籠むしのね
8　一、かたミを見るたひ
9　一、をくり捨て、帰るの

したき物（三）

10　一、当世はやる、たて道く
11　一、すき屋の作事

犬まくら

いぬまくら（写本、国籍類書の内、七十二題・三百四十三句）

天理図書館蔵本翻刻第二八九号

12 当世はやる、だて道具
13 すきやの作事
14 遊山

一　いやな物（四）

15 へたの、すきに、よぶ
16 ゆさん見物の御供
17 挙用もせぬ述懐
18 高麗入　わるき友
19 かけの有夜、客人の長座

一　ミたき物（五）

20 若衆の顔　月花ハ更也
21 同尻　人によりて、へゝも
22 上手の能
23 すきに入たる道具
24 ほれたる若衆の心中　同文も

12 一、尻　同へゝも
13 ゆさん

いやなる物（四）

14 一、へたの数寄ニ、よぶ
15 一、遠山見物ノ御供
16 一、きよやうせぬ述懐
17 一、高麗入の供
18 一、かけの有夜、客ノ長座

見たき物（五）

19 一、わか衆のかほ　花月も
20 一、尻　同へゝも　但、人ニよる
21 一、すきニ入タル、道く
22 一、ほれたる若衆ノ心中并文も

犬まくら（写本、枡型本、七十一題・三百二十句）

仮名草子　307頁 下

中世　憂世

- 辛い世の中
- 仏教的無常観・厭世思想

近世　浮世

- 太平の世
- 享楽すべき

浮世草子

写実的・享楽生活・好色風俗

仮名草子の後をうけて近世的な小説

Nippon Eitai Gura de Ihara Saikaku
https://www2.nhk.or.jp/school/movie/outline.cgi?das_id=D0005150079_00000

Apresentação do Pedro Malta sobre Ihara Saikaku
Manhã e noite

最初の作品　井原西鶴（1642-1693）俳諧

1682　『好色一代男』　好色物
1685　『西鶴諸国話』　雑話物
1687　『武道伝来記』　武家物
1688　『日本永代蔵』　町人物　「長者経」1627を基に
勧善懲悪・始末

KUSAZŌSHI 草双紙 (*Nihon rekishi daijiten*)

Livros ilustrados do início do século XVIII a meados do século XIX na capital Edo.

Akakohon Início: 1673-81 半紙半截(はんせつ)

Akahon com capa avermelhada voltada para mulheres e crianças. Uma história com um ou dois volumes finos ilustrados. Início: 1704-1711; grande produção: 1716-1736. 大半紙半截の中本形式となり、五丁で一冊とするのが赤本の定形となった

Histórias como *A batalha do macaco e do caranguejo, Sarukanigassen*; *O pardal da língua cortada, Shitakirisuzume* e outras histórias da "carochinha"; de fantasmas.

1748-1764: *Kurohon*, também ilustrados.

1744: pelos *Aobon*. Inclui o público adulto.

1806: *Kibyōshi; Gōkan*

Controle do Governo. Kibyōshi é um termo literário que se fixou pós-Meiji, antes chamados de *aobon*, *kusazōshi*, *ezōshi*, etc.

草双紙　赤本

Supõe-se que havia um título no espaço à direita, diferente do que está na “capa” e que foi impresso após o seu apagamento.
Essa parte corresponde à Introdução.

（二）千代に千代弥千代かわらぬ日の本の、君の恵みのありがたく、しちく扶桑の果てし迄、なびき従ふ時なれば、干戈を倉に納め置き、己がさまゞなす業を、われ知り顔にそこはかと、爺や婆の昔語り、いつわりあらば御免なれ。

絵(一)　右端に別枠があり、ここに内題が刻されていたと推定される。題簽の題名とは別の「異国…」といった題などがあり、はばかって削除してからの印行と考えられる。ここは一般書の序文に当たる。有難い泰平の世、それぞれの生業を知った風にとりとめもなく申しますが、他愛ない爺婆の昔語り、違っていたら御免なさい、といった主旨。

題簽　(だいせん) ふだ、見出しなどを書くもの

（続き）
日下開山
名人ぞろへ　藤田
ほうかの根本

（一）千代に千代弥千代かわらぬ日の本の、君の恵みのありがたく、しちく扶桑の果てし迄、なびき従ふ時なれば、干戈を倉に納め置き、己がさまぐ〳〵なす業を、われ知り顔にそこはかと、爺や婆の昔語り、いつわりあらば御免なれ。

一 千代に千代を重ね。非常に長い年月を強調した表現。
二 弥はいよいよ、重ねての意。幾千代、八千代に同じ。
三 日本の美称。日昇るもとの国の意。
四 天子の恩恵。
五 茨竹(くしち)か。小家に生える茅や竹。
六 古代中国で、太陽の出る東海の中にあるとされた神木。転じて日本の異称。
七 すべての人が服従している。
八 干は盾(たて)、戈は矛(ほこ)で武器の意。武器を倉に納め置き、は戦乱のない泰平のさまをいう。
九 めいめい自由に営む生業。
一〇 知っている顔をして。知ったかぶって。
一一 何というわけもなく。とりとめもなく。
一二 祖父や祖母の。爺婆の。

（続き）
日下開山
名人ぞろへ　藤田
ほうかの根本

（三）▲韃靼[一]の北に当たりたる国にては、日本人[二]の殊の外おそる〻。とりわけ義経[三]と云事をおそる。[四]ならびの国をせめ来るとき、義経の人形を見すれば、ころび倒れて逃げる。人形を見る事をきらいて、顔に暖簾のごとくに下げてゆき、刀にてせめ寄る。もし風の吹きて、暖簾のごとく成もの吹き上げて人形を見るとひとしく、あわてふためき逃げるよし、聞き伝へし。

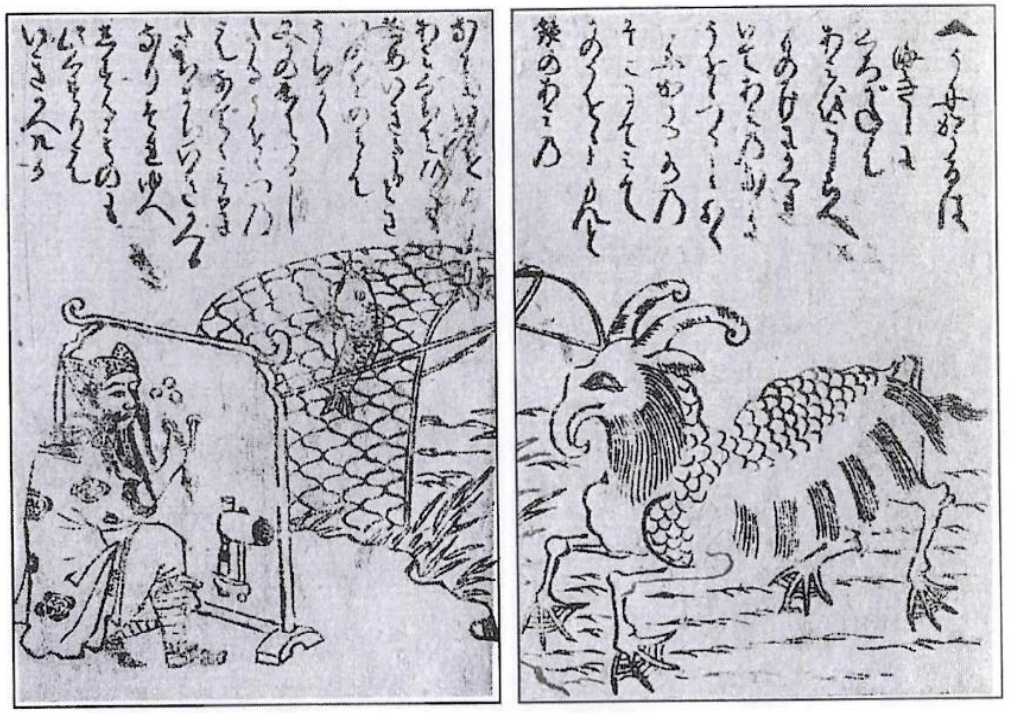
一 タタール。モンゴル草原を支配する大部族の名。後には彼らを屈伏させたジンギス汗の勢力総体の名称。

二 「を」に同じ。撥音の直後に続く格助詞「を」の形。

三 源義経（一一五九―八九）。平安末期から鎌倉初期の武将。義朝の第九子で母は常盤。幼名牛若丸また遮那王。兄頼朝に追われ衣川で自刃した悲運の武将として民衆の同情を得、伝説では逃れて蝦夷に渡り、更に大陸に渡ってジンギス汗となったとされる。

四 隣国を（韃靼の北の国が）。

（続き）
日下開山
名人ぞろへ 藤田
ほうかの根本



（三）

（三）▲五うにかうるは、海岸に鉄にて網をこしらへ、物陰にかくれいて網のなかに魚をつるしおく。うにかうる水の底にて見て、かの魚をとらんと鉄の網のなかに入るを網口をひくゝとめ、生きたるとき角を鑿にて打ち欠く。又かの餌につるしたる魚を角にて撫でてみるに、たちまち生きかへるなり。それゆへ死するものも、此くすりにて生きかへるか。

五 ポルトガル語 Unicorne。海棲の一角獣。華夷通商考・四・インデヤの土産の項に「独角獣（ウンカウル）此国深山ノ河水ニ毒虫多シ諸ノ獣敢テ先ニ飲事ナシウンカウル来テ其角ヲ以テ河水ヲ攪マセテ飲テ後諸獣皆飲之トソ」とある。解熱剤一角（いっかく）の原料とされた。

六 「を捕獲するには」の意。

七 「低く止め」か。

八 生きたままの意であろう。

絵（三） 左の、ころび倒れて逃げる二人が韃靼の北の国の武士。鎧の袖や草摺、刀を左腰に差す形などは日本の武装と異なるところがないが、曲線の縁縫のある内着や直刀、頭髪などに異国風を表現しようとしたことが窺える。右の一人が攻められた隣国人。こちらの方が唐人風に描かれている。これらの描法は、古浄瑠璃「阿弥陀の本地」の挿絵、戦闘場面の人物あたりに類似を求めることができる。両手で遣っている人形が義経。甲冑姿ではなく、広袖に冠をつけた御大将の姿で、これなどにも古浄瑠璃「安宅高館」など、義経を主人公とした人形浄瑠璃の投影が感じられる。

絵（三） 右側に描かれているのが「うにかうる」。水牛のような頭、蟻食のような口、水禽のような足に描かれ、山海経などの空想上の獣図を参考にしたか。後の一角纂考（木村孔恭著、寛政七年刊）には偶蹄で姿は馬に似、前頭に一本長い角のある獣の図が紹介されている。

捕獲者は唐風とも異なる異国風俗めかした服装で描かれている。衝立には鑿と玄翁が差してあり、三つの小穴は監視用らしい。二つの穴から出した紐を握っているのは、機を見てこれを切り、捕獲網を向うへ倒して捕える方式らしいが、何か空想めいておかし味がある。

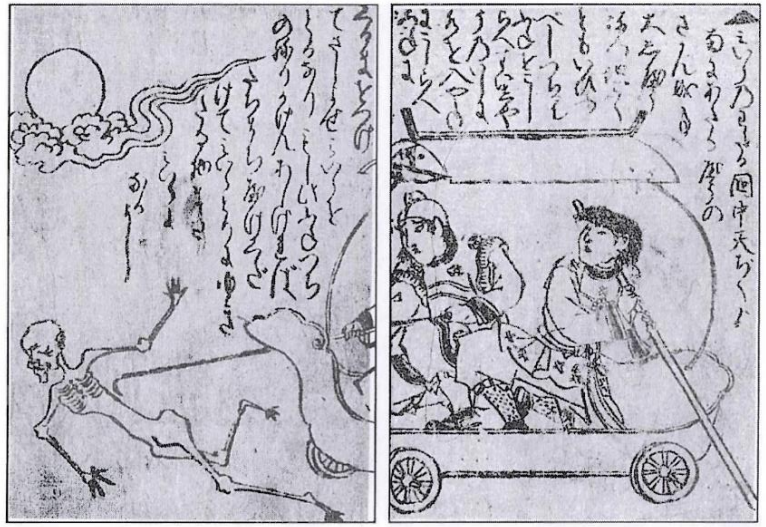
（続き）
日下開山
名人ぞろへ 藤田
ほうかの根本

（六）▲木乃伊[一]のわたる国、中[二]天竺より南にあたる。陽の盛んなる成事大焦熱地獄[四]とも言ひつべし。土[五]にて舟をこしらへ、水晶の石に水を入、屋根にこしらへ、舟に車をつけてさし寄せ、木乃伊[六]を取るなり。もし此舟、土[七]の練り加減あしければ、たちまち焼けくだけて、木乃伊[八]取りに行きたる物、また木乃伊になるよし。

大地獄の一。熱鉄や釜で身を焼かれるなど猛火、炎熱の苦しみを受ける。五 ミイラ取りの乗物については、単に車（天竺徳兵衛渡天物語）、松木丸太船に六尺ばかりの帆をかけて砂原を走る（渡辺幸庵対話）などがあり、土車が出てくる文献は今のところ本作以降成立のものにしか見出せない。また水晶に水を入れた屋根については他に未見。六 乗物をミイラの方へ近寄せて。七 本作より相当後の文献であるが、閑窓瑣談（佐々木貞高著、天保十二年刊）の「俚俗の異説」の条に「其辺を往来する人は、土にて製造たる車に乗て過る事なり。万一誤て地に落れば、忽に焦れて木乃伊となる。亦其木乃伊を取らんとて、土の車に乗て行者あり。其者も乗たる車が破れるか崩れて地に落れば、同じく木乃伊になるといふ」とある。八「ミイラ取りがミイラとなる」という諺の由来譚としている。

絵（六）　俗説を視覚化したものであろうが、どこかとぼけているところが痛快。粉本の存在はつきとめていない。土の車に透明な水晶の水入り屋根、竿で砂の海を漕ぎ、鉤のついた棒でミイラを引き寄せている。このミイラの描法は、松阪市射和町の地蔵胎内にあった「どうけるつくし」の餓鬼とどこか似ている感じもある。

閑窓瑣談のミイラの話はこの赤小本あたりが出どころかもしれない。



1. Do português “mirra”. Conservante que se usava para manter os cadáveres no Egito, e, por extensão, a múmia. Chegou ao Japão pelos holandeses e fez muito sucesso entre 1661-1681. De origem vegetal, acreditava-se que era feito do próprio cadáver. Foi muito usado na composição dos *haikai* da Escola Danrin.

Omitidas as duas páginas anteriores 四・五

（続き）
日下開山
名人ぞろへ　藤田
ほうかの根本

草双紙　黒本

CAPAS Vol. I, II e III – Apenas o Título e o registro de que é nova edição Desenho na parte superior é uma fênix. A parte inferior é paulovnia usada para enquadramento.

V.III ermitão gerando um vento sinistro, com o “rosário”, para atrair o barco, e Ashinmaru.

V.II Norisada em pé, com traje a rigor e chapéu de samurai, repreendendo Tameaki sentado perto a um *tanzaku* com poema *waka.*

V. I - Imperador Godaigo e Kamikazura com um quimono de gala.

草双紙　黒本　　熊若物語

Marcas apagadas da edição

絵(一)　仮屋で米穀を販売する場面。米穀を入れた長櫃を前に下役人二人が枡ではかり頒つ様子。布袋や桶を持って買いにくる窮民。寛文頃刊、絵入本太平記の挿絵に酷似する。

熊若物語

草双紙　黒本

O título *Kumawaka* tem origem em Ashin, tomo II de *Taiheiki*. É o nome de Hino Kunimitsu (1319-63) quando criança.

(上)

(一)　一人王九十五代の帝を後醍醐天皇と申。二元亨元年の頃、日照り旱魃三□□て大飢饉あり、銭四三百をもつて粟一斗を買う。帝、飢人を不憫に思し召し、朝餉五の供御をやめられ、施行六に引かれけり。その上、二条の町に仮屋を建てて、米穀価七心安く売らせられしかば、人民九年の蓄へ有がごとし。

(男)「こゝへも計りをよく頼みます」

(女)「やれ〳〵帝様の御慈悲、ありがたい事かな」

一 太平記・巻一の冒頭に「爰ニ本朝人皇ノ始、神武天皇ヨリ九十五代ノ帝、後醍醐天皇ノ御宇ニ当テ」とある。後醍醐帝は、現在では第九十六代の天皇とする。後宇多帝の第二皇子。在位、文保二年(一三一八)―延元四年(一三三九)。

二 太平記・巻一(以下いずれも巻一)、元亨の大旱魃による飢饉のおり天皇が窮民を救われた記事「銭三百ヲ以テ、粟一斗ヲ買」「朝餉ノ供御ヲ止ラレテ、飢人窮民ノ施行ニ引レケル…」「二条町ニ仮屋ヲ建ラレ」「人皆九年ノ畜有ガ如シ」をそのまま用いる。

三 底本磨損のため判読できず。

四 白氏文集三・捕蝗の「粟斗銭三百」をそのまま用いて、高騰の状を表現したもの。

五 天皇の儀式ばらない食事。

六 仏語で、物を施し与えること。

七 太平記によれば、検非違使の別当に命じて富裕の人が蓄えている米穀を点検させ、二条町の仮屋で一定の価額で売らせ高騰を防いだ。

八 礼記・王制の「国に九年の蓄え無きを不足と曰う」による表現。豊かになった。

(三)

草双紙　黒本

熊若物語

絵(三)　御簾の前の後醍醐天皇と三位殿の局、几帳の手前に三人の女官。天皇は通常御簾内に居られ御顔は描かない。当図は御簾の前に頭を描き位置に矛盾がある。説明的に描いた結果か。

(三)　一文保二年の頃、二西園寺実兼の御娘后に備はり、弘徽殿に入せ給へ共、三君恩葉よりも薄くをわせしかば、秋の夜長きに恨み沈ませ給ふぞいたわしき。

四そのころ五安野中将公廉の御娘六三位の局、七中宮に有しが、天皇一度御覧ぜられ、他に異なる御覚へ、八三千の寵愛一身にありて、たちまち九准后の宣旨下りしかば、人みな皇后の思ひをなせり。一〇これより帝、朝政もし給はず。一一何事によらず、准后の一二御口入といへば、忠なきに褒美せられ、理も非に落ちけるは、情なふこそ見へにける。

一 太平記に「文保二年…」とあり、藤原禧子立后の件。二 関東申次を世襲する公卿。後西園寺入道相国。正応四―五年太政大臣。一三四九―一三三。三 太平記の文による。白氏文集十六・昭君怨の「君恩薄如紙」を用いた。四 太平記「其比安野中将公廉ノ女ニ、三位殿ノ局ト申ケル女房、中宮ノ御方ニ候レケルヲ、君一度御覧ゼラレテ、他ニ異ナル御覚アリ」。五 藤原公仲の子。六 三位殿の局。安野公廉女、藤原廉子。後村上天皇の母。正平十四年(一三五九)没。七 中宮禧子に仕えていたの意。八 太平記の文による。白楽天の長恨歌の一節「三千寵愛在二一身一」を用いた。九 太皇太后、皇太后、皇后の三后に准じて年官年爵を賜る特別待遇の地位。准三后。一〇 太平記では准后の宣旨の前に「是ヨリ君王朝政ヲシ給ハズ」とある。一一 太平記「御前ノ評定、雑訴ノ御沙汰マデモ、准后ノ御口入トダニ云テゲレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ与、奉行モ理有ヲ非トセリ。…浅増カリシ事共也」。一二 太平記では「御口入(ごくう)」とする。御とりなし。一三 太平記「武臣相模守平高時ト云者アリ。此時上乖二君之徳一、下失二臣之礼一」。一四 北条高時。鎌倉幕府十四代執権。一族と共に自刃。一三〇三―一三三三。一五 太平記「代々ノ聖主、…東夷ヲ亡サバヤト、常ニ叡慮ヲ回サレシカドモ」。一六 大納言藤原俊光の子。後醍醐天皇に用いられ討幕計画に活

草双紙　黒本

熊若物語

（三）その頃鎌倉の武臣は相模[一四]入道高時とて、大悪無道の振舞、天子をもないがしろにしてければ、[一五]天皇かねては入道を滅ぼさんとおぼす。[一六]日野中納言資朝、[一七]右少弁俊基、[一八]四条の中納言隆資、[一九]尹の中納言師賢、[二〇]此四人に仰て、[二一]密かに入道を調伏被成[二二]けり。中にも資朝[二三]はさまぐ工夫を回らし、さりぬべき兵を召さんと、密談の上、[二四]伯耆十郎頼定、多治見四郎国長、勅に応じけり。[二五]資朝、天皇の令旨を見する。

（資朝）「その時節は、忠勤の励み召されい」

（頼定）「高時を滅ぼさん事、踵（くびす）を回（めぐ）らすべからず。そつとも御気遣いあられますな

Residência com cerca de palha e *hajitomi.*
資(Hino Suketomo) conversa sobre o *bushi* a ser contratado, mostrando a ordem do imperador e mostrando sua lealdade.
尹 In e outro nobre sem identificação.
O *bushi* 則veste um quimono com estampa igual de 常葉駿河則貞 na ilustração 六. Essa personagem é 六波羅（武家）方. Seria erro de indicação do autor?
A sujeira no rosto é da própria matriz.

一三 太平記「武臣相模守平高時ト云者アリ。此時上乖二君之徳一、下失二臣之礼一」。一四 北条高時。鎌倉幕府十四代執権。一族と共に自刃。一三〇―一三三。一五 太平記「代々ノ聖主、…東夷ヲ亡サバヤト、常ニ叡慮ヲ回サレシカドモ」。一六 大納言藤原俊光の子。後醍醐天皇に用いられ討幕計画に活躍、佐渡に配流の上処刑された。一三九―一三三。一七 藤原(日野)俊基。種範の子。代々儒家。資朝と共に謀り鎌倉葛原岡で処刑された。?―一三三。一八 隆実の子。検非違使別当。後醍醐天皇の死後後村上天皇を補佐し、足利義詮との戦に敗死。?―一三五。一九 花山院師賢。北条高時の京攻めの際に後醍醐天皇と延暦寺に籠った。事破れて下総に配流、三十二歳で病没(一三三)。二〇 太平記には「只日野中納言資朝、蔵人右少弁俊基、四条中納言隆資、尹大納言師賢、平宰相成輔計ニ、潜ニ仰合ラレテ」と五人が挙げられる。二一 太平記では「関東調伏ノ為ニ、事ヲ中宮ノ御産ニ寄テ、加様ニ秘法ヲ修セラレケルト也」とあり、御安産の祈禱として行なった。二二 「被」は底本「は」とある。二三 太平記「土岐伯耆十郎頼貞、多治見四郎次郎国長ト云者アリ。…資朝卿様々ノ縁ヲ尋テ、昵ビ近カレ」。二四 太平記「頼貞」とする。二五 令旨を見て両名が勅に応じた叙述は太平記にないが、土岐頼員が舅に白状する言葉に出てくる。

草双紙　青本

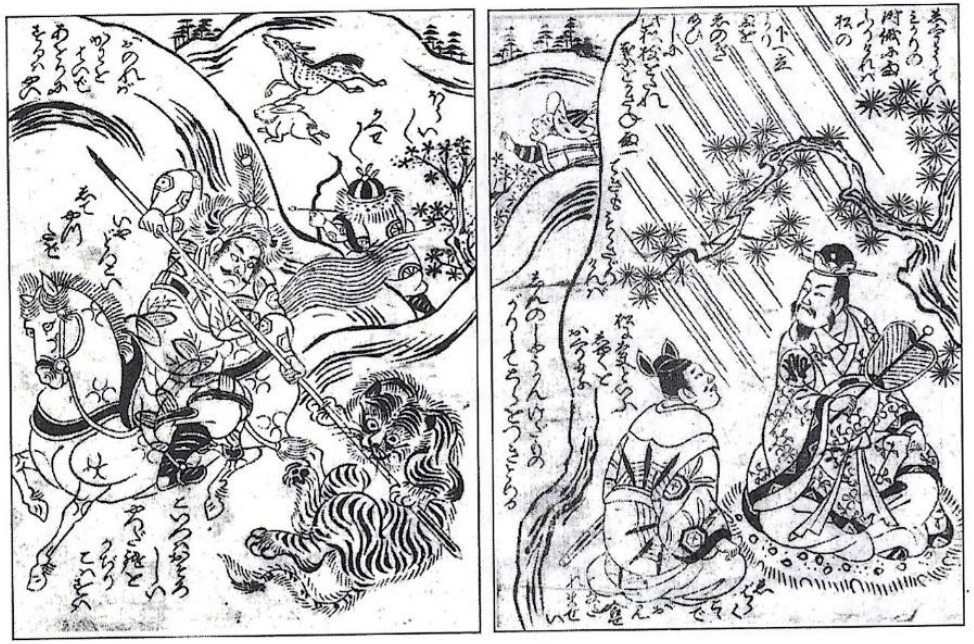
草双紙　青本

漢楊宮 下
p.13 a 18

漢楊宮 中
p. 7 a 12

漢楊宮 上
p. 1 a 6

p.3 de 6páginas



p.2 de 6páginas

p.1 de 6páginas

（一）

（上）

（一）秦の始皇帝、ある夜不吉の御夢を見給ふ。赤き衣裳の童子、青き衣裳の童子と日輪を取らんと争ひけるが、ついに赤き童子日輪を奪ひ立のく。赤きは高祖、青きは項羽也。帝、御夢さめてほうぐ尋ね給ふ。

絵（一）この場面は古浄瑠璃「感陽宮」にはない。通俗漢楚軍談・巻之一に拠ったものとみられる。

吹出しの部分は夢を示し、童子にも「高」（高祖）「項」（項羽）の文字がある。項羽の着衣の模様は月を象ったものと受取れる。

一 中国古代の王朝秦の第三代の王。

二 中国古代の五行説による五色（青黄赤白黒）の一。堯の後裔である漢の高祖劉邦は火徳で赤色。史記・高祖本紀第八に、蛇に化した白帝子（秦）を赤帝子（漢）が斬る話がある。

三 同右。楚（項羽）に青を当てる記述は史記に見当たらない。通俗漢楚軍談（元禄八年刊）・巻之一に始皇帝が日輪（王位）を奪い合う青衣紅衣の小児を夢見て不吉の思いをする場面があり、青衣の小児は東方より、紅衣の小児は南方より走り来たとあるのを、そのまま用いたのであろう。赤は四神の方位で南、青は東に当たる。

四 太陽。王の象徴。 五 史記・高祖本紀第八に「東南有天子気、於是因東游以厭之」とあり、始皇帝が劉邦（沛公）の天子の気を鎮める目的で各地を遊幸し秦の頌徳碑を建てたことが見える。 六 通俗漢楚軍談では「巡

(三)

絵(三)　古浄瑠璃「感陽宮」の冒頭部分によって狩猟の場面とした絵組。松下の始皇帝は画題として著名。臣下は君臣用の烏紗折上巾の類を冠る。

章邯は感陽宮のこの場には出ず、馬上から虎を突くこの形は画典通考・巻之十「蒙古酒宴」の借用。

(三)　始皇帝御狩[六]の時俄に雨降りければ、松の下へ立寄り、雨をしのぎ給ひしに、此松枝を垂れ葉を重ね、雨一滴も漏らさざりければ、松に大夫といふ爵を贈り給ふ。

(臣下)「しばらくこゝでお見合せなされませい」

秦の章邯、獣狩りして虎を突さとめる。

(章邯)「己が皮を剝いで障泥にするはやい。いや、どつこい、してやつたぞ。こいつは恐ろしい奴だ。鑓をかぢり毀すは」

(狩の武将)「ほういく、かへせく」

見える。六 通俗漢楚軍談では「巡狩」とし天下を巡行して民状を視察する意に用いている。謡曲「老松」、古浄瑠璃「感陽宮」では狩。七 史記本文に「風雨暴至、休於樹下、因封其樹為五大夫」とあり松と特定していない。和刻本史記の注に「光縉曰、按秦始皇封松為五大夫」とあり、早くから「松」に固定されたようである。八 謡曲「老松」に「此松俄に大木となり、枝を垂れ葉をならべ、木の間透間を塞ぎて、其雨を漏らさざりしかば、帝大夫といふ爵を贈り給ひ」。古浄瑠璃「感陽宮」にもほぼ同様。

一 秦の猛将。二世皇帝の時反秦連合軍と奮戦、のち趙高の不信を被って項羽の門に下り、紀元前二〇五年劉邦に滅ぼされた。二 馬具の一種。衣服の汚れを防ぐため下鞍に下げる皮革製の大型泥よけ。

(三)

絵(三)　二重雲形で仕切る二場面。唐扇に孔雀を止めてさし出す燕丹。頭上に雲気が漂う。

始皇帝の冠は小長方形の板から宝飾を垂らした冕(べん)。

左図は牢檻の中で鎖につながれ縛られている燕丹。牢破りの景清の形等に類似する。

左側の袴に「せ」とある人物は章邯(せうかん)。

右下方の籠に頭の白い鳥、一角の生えた馬。古浄瑠璃の詞章「つの有馬、そくちに来り、ていせんにひさをおる」。

(三)　始皇帝、燕丹に色〻難題を言ひかけ給ふ。

燕丹王、秦の国へ虜になり給ふ。孔雀を捧げよとの勅命なりければ、空を招き給ひしかば、孔雀来つて燕丹が団扇に止ま

一 秦の猛将。二世皇帝の時反秦連合軍と奮戦、のち趙高の不信を被って項羽の門に下り、紀元前二〇五年劉邦に滅ぼされた。 二 馬具の一種。衣服の汚れを防ぐため下鞍に下げる皮革製の大型泥よけ。

三 燕は渤海の西に位置する戦国七雄の一国、丹は燕の最後の太子。紀元前二二八年秦の人質となったが冷遇を怒って逃げ帰り、翌年刺客の荊軻を遣わして始皇帝殺害を謀るが失敗。翌年秦に攻撃され燕王喜が太子の首を献じたが許されず、燕は同二二二年滅亡。 四 古浄瑠璃「感陽宮」に孔雀の難題と悪象攻めがある。 五 鳳凰、迦陵頻伽とともに浄土を飛び囀る鳥。御伽草子「梵天国」にも天皇が迦陵頻伽と孔雀を召す難題がある。

（三）

る。

（臣下）「こりや面妖。不思議だ〳〵」

始皇帝、燕丹を獄屋に押し込め、の給ひけるは、「烏の頭白くなり馬に角生へたらば命助ん」と有ければ、不思議や烏の頭白く成り、馬に角生へたるを差し上る。それより燕丹を許し給ふ。

（烏）「かあ〳〵」

章邯勅使に立ち、燕丹を助くる。

（章邯）「こなたは命強いお人じや」

六 古浄瑠璃「感陽宮」に「ていぜんにしんろうを立、ゑんだんをめしこめ」。 七 「宣（のた）ふ」に同じ。

八 史記・刺客列伝の末に「太史公曰。世言荊軻其称ニ太子丹之命一。天雨レ粟。馬生レ角也。太過」とあり、「烏頭馬角」という成語を生む。「馬角の変」。

Fontes

ASAKURA, Haruhiko (org.*) Kanazōshi shūsei Dai5kan*. Tokyo shuppan, 1984
SHIN NIHON KOTEN BUNGAKU TAIKEI 83 KUSAZŌSHI, Notas de Kimura Yaeko, Uda Toshihiko e Koike Masatane. Iwanami shoten, 1997.
TOKUDA Kazuo. *Otogizōshi Hyakka Ryōran.* Kasama Shoin, 2008.